

三宅芳夫著『世界史の中の戦後思想—自由主義・民主主義・社会主義』

大場, 健司
九州女子大学人間科学部心理・文化学科 : 専任講師

<https://doi.org/10.15017/7318875>

出版情報 : 九大日文. 44, pp. 48-52, 2024-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :



◎書評

三宅芳夫著

『世界史の中の戦後思想——自由主義・民主主義・社会主義』

大場 健司

一九八〇年代にポストモダンイズム (postmodernism) が流行して以降、「理念」を語ることは嘲笑されることとなった。しかしながら、冷戦 (Cold War) 終結以後、共產主義 (communism) という対立項を失った新自由主義 (neoliberalism) が拡大するにつれ、①社会福祉は軽視され、貧富の差は拡大、②覇権国家アメリカの国際秩序のもとで戦争が行われ、③地球の生態系は回復不可能なほど破壊されている。

私事で恐縮だが、拙著『1960s 失踪するアメリカ——安部公房とポール・オースターの比較文学的批評』(春風社、二〇二二年二月)で行ったのは、安部公房(一九二四—一九九三年)とポール・オースター (Paul Auster, 1947-2024) のアナキズム (anarchism) を、新自由主義に抵抗する政治的なオルタナティブ (alternative) として提示すること、これであった。その際に拙著の思想的フレームワークとなったのが、①Jill P. サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-1980) の実存主義 (existentialism)、及び②柄谷行人 (一九四一

年)の、自由な諸個人による「アソシエーション」(association) 論であったが、サルトルや柄谷について考察する際に多大な示唆を与えてくれたのが、三宅芳夫氏の御著書『知識人と社会——Jill P. サルトルにおける政治と実存』(岩波書店、二〇〇〇年五月)、及び『フアシズムと冷戦のはざま——戦後思想の胎動と形成 1930-1960』(東京大学出版会、二〇一九年一月)であった。「正統派マルクス主義」には還元され得ない左翼思想を考察する上でも、三宅氏の御研究は「アソシエーション」を目指すための稀有な「羅針盤」として存在しているだろう。

本書『世界史の中の戦後思想——自由主義・民主主義・社会主義』(地平社、二〇二四年四月)では、「フアシズム」と「国際冷戦レジーム」に抵抗した「戦後思想」が「世界史」的コンテクスト (context) から分析されており、『フアシズムと冷戦のはざま』の「姉妹編」(二七六頁)を成すものとして地平社から出版された。地平社は、岩波書店の論壇誌『世界』の編集長を務められていた熊谷伸一郎氏によって、「民主主義のインフラ」としての独立したメディア」を目指して二〇二四年一月に設立された、新たな出版社である(編集長メッセージ(地平社ホームページ <https://chitetsu.co.jp/kumagai/>) 二〇二四年八月二七日参照)。地平社では、論壇誌『地平』が二〇二四年六月に創刊されるなど、ジャーナリズム (journalism) とアカデミズム (academism) を柱にした出版活動が盛んに行われている。今後も、このように国家権力から独立した出版メディアの重要性がますます強まるだろう。

それでは次に、本書の内容を章ごとに確認していきたい。

まず、本書のフレームワークを示した序章を詳細に検討したい。序章で行われているのは、「自由主義」(liberalism)、「民主主義」(democracy)、「社会主義」(socialism)の関係を歴史的に考察することである。現在では「自由民主主義」(liberal democracy)というように「自由主義」と「民主主義」は重なり合うものとして語られるが、元来、両者は相反する概念であった。I・ウオーラーステイン(Immanuel Wallerstein, 1930-2019)の「世界システム論」(World-Systems Theory)においては、一九世紀は「自由主義」の時代であり、それは平等を志向する「民主主義」とは対立するものであった。

しかしながら、第二次世界大戦(WWII, 1939-1945)後、「自由主義—民主主義体制」が形成され、主権在民にその基本を置く「民主主義」に対して、「自由主義」が一定の譲歩を行うことになる。それは、この背景に「社会主義」からの異議申し立てがあったからである(三〇頁)。

また、「資本主義」(capitalism)を「搾取のシステム」と捉えるならば、「社会主義」とは、「共産主義」(communism)＝「自由なしの平等」でも、「自由主義」＝「平等なしの自由」でもない「自由にして平等」を提示するものとなる(三二—三七頁)。本書では、①個の自由、②死刑廃止、③反軍国主義を主張した、P＝J・プルドン(Pierre Joseph Proudhon, 1809-1865)らの「個人主義的社會主義」や「アナルコ・サンディカリズム」(anarcho-syndicalism)、狩猟採集民ブッシュメン(Bushman)の流動

的なバンド社会(band society)が高く評価されている。これを受け継ぐのが、本書で提示される「二一世紀の社会主義」なのであり、「自由にして平等」という「希望」を目指す上で指針となるのが、J＝P・サルトルやJ・デリダ(Jacques Derrida, 1930-2004)らの思想である(五五—五六頁)。

第一章で行われているのは、「自由主義」／「民主主義」を「世界システム論」的視座から考察することである。すなわち、第二次世界大戦後の「国際冷戦レジーム」において、「民主主義」と「平等」を掲げる東側に対し、北＋西側(自由主義)は労働者層・中間層の支持を得るため福祉国家体制(民主主義を受け入れざるを得なかった。しかしながら、一九七〇年代中頃に始まる「新自由主義グローバルイズム」(neoliberal globalism)による世界的再編により、「自由主義」／「民主主義」の同盟に亀裂が生じる。この流れは経済学的には、「新古典派」(neoclassical economics)→「ケインズ主義」(Keynesian economics)→「古典的自由主義」(classical liberalism)への回帰、という流れと一致する。

第二章では、「第三世界」(Third World)による「国際冷戦レジーム」への抵抗が扱われている。冷戦期にソ連に対して工業力や軍事力において圧倒的に優位に立っていたにも関わらず、アメリカはソ連を危機として表象(represent)することで、世界システムにおける覇権国家を目指す。「第三世界」とは汎アフリカ会議(African-African Congress)や、アジア・アフリカ会議(Asian-African Conference)といった反植民地主義ネットワークによって育まれた国際的なプロジェクトであった。しかしながら、このような

「国際冷戦レジーム」への抵抗に対して、アメリカは①CIAによる工作、②軍部クーデタによる政府転覆を通して巻き返しを図る。この過程でコンゴではルモンバ (Patrice Lumumba, 1925-1961) が拷問・殺害され、インドネシアでは一九六五年に多くの共産党員が虐殺された。アメリカを覇権国家とする「新自由主義グローバリズム」とは、「新しい植民地主義」の継続に過ぎない(九〇頁)。

第三章では、ユーラシア大陸の両端(日仏英)の戦後思想が、いかに戦中のファシズム (Fascism) との対決の中で生まれたかが論じられている。具体的には、フランス語圏では、J・P・サルトルやシモーヌ・ド・ボーヴォワール (Simone de Beauvoir, 1908-1986)、英語圏では E・ホブズボーム (Eric Hobsbawm, 1917-2012) や R・ウィリアムズ (Raymond Williams, 1921-1988) の名が挙げられる。日本語圏では、多くの思想家が治安維持法違反容疑で逮捕・留置された経験を持つ「第一世代」(埴谷雄高、久野収、椎名麟三、都留重人、武田泰淳、荒正人、丸山眞男、野間宏、大西巨人)、ファシズムへの組織的抵抗が一九三三—一九三四年頃に崩壊したのちの「第二世代」(日高六郎、堀田善衛、加藤周一、中村真一郎、福永武彦、白井健三郎、加藤道夫、芥川比呂志) が文学・思想・政治を横断しながら論じられており、刺激的だ。本書では「戦後思想」が①「正統派マルクス主義」との距離(九八頁)、②植民地独立を求める朝鮮人や中国人との交流(一〇七頁)から論じられており、特筆に値する。特に、荒正人(一九三二—一九七九年)ら『近代文学』グループへの評価は文学研究者にとって極めて示唆に

富む。例えば、荒は朝鮮人作家、金史良(一九二四—一九五〇年?)をアイランド出身の作家 S・ベケット (Samuel Beckett, 1906-1989) と比較している(一〇八頁)。花田清輝(一九〇九—一九七四年)や E・W・サイード (Edward Wadie Said, 1935-2003) による A・カミュ (Albert Camus, 1913-1960) の『異邦人』(L'Étranger, 1942) 論と同じく、植民地文学の視座から西洋文学との比較を行った本章は、比較文学的にも非常に重要である。

第四章・第五章では、「戦後改革」において大きな役割を担った H・ノーマン (Herbert Norman, 1909-1957) の功績が詳細に論じられている。加藤周一(一九一九—二〇〇八年)、鶴見俊輔(一九二二—二〇一五年)らの戦後思想は、その後、大江健三郎(一九三二—二〇一三年)や小田実(一九三二—二〇〇七年)らの戦後民主主義に受け継がれることになる。ここでは、その戦後思想が登場する前提条件となつたのが、「敗戦」と「戦後改革」≡「戦後革命」であったことが論じられている。この「戦後改革」において重要な役割を担ったのが、連合国軍最高司令官総司令部 (SCAP/GHQ) に参加した H・ノーマン (Herbert Norman, 1909-1957) ら太平洋問題調査会 (GPR) の「若き「ラディカル」たち」(二二八頁)だった。日本に生まれたノーマンはカナダから英国ケンブリッジ大学トリニティカレッジ (Trinity College)、米国ハーバード大学燕京研究所 (Harvard-Yenching Institute) に留学しており、平和主義的左派が拡大していた「赤いケンブリッジ」においてラディカル化する(二三九—四〇頁)。都留重人(一九二二—二〇〇六年)らとの交流もあったノーマンを中心として、D・マッ

カーサー (Douglas MacArthur, 1880-1964) の意図とは反する形で、「戦後改革」はなされたのである。これと呼応する形で日本の労働運動・女性解放運動・農民運動が活発化する。したがって、「戦後改革」はアメリカに「押し付けられた」ものではなく、内発的にも日本の支配層に「押し付けられた」ものである(一六二頁)。この点で、第五章で非常に詳細に論じられている「日本国憲法」の制定過程、「教育基本法」の成立過程は、今後、憲法を論じるにあたっては必読となることだろう。明治憲法以上に天皇制への統合装置を果たしたのが「教育勅語」であつた(一八七頁)。だからこそ、第一次安倍政権下で「教育基本法」の改正が行われ、それが右派勢力にとっては日本国憲法改正のリハーサルとなつたのである(一九〇―一九一頁)。

第六章で扱われているのは、ユダヤ系歴史家エリック・ホブズボーム (Eric Hobsbawm, 1917-2012) である。H・ノーマンと同じく「赤いケンブリッジ」において学んだホブズボームは、「マグレブにおけるフランス帝国主義」論を最初の研究テーマに選ぶ。この背景にインドなど植民地からの留学生との交流があつたことは興味深い(二三九頁)。また、R・バルト (Roland Barthes, 1915-1980) や J・P・サルトルなど、フランスの左派知識人との交流は、ホブズボームのスターリニズム (Stalinism) との距離の置き方に影響を与えたという(二五四―二五五頁)。ホブズボームの『極端な時代』(Age of Extremes: the Short Twentieth Century, 1914-1991, 1994) では、「資本主義」に内在する欠陥として、①「地球生態系への負担」、②「格差と貧困の拡大」が挙げられてい

た(二五七―二五八頁)。『極端な時代』では「アヴァンギャルド」(avant-garde)の問題も論じられている。一九七〇年代以降の高度消費社会において「アヴァンギャルド」は「マーケティングのサブ・セクション」へと転落してしまう。しかし本章では、世界の「インターナショナル」(International)たちと交差した「野生の前衛」(avant-garde sauvage)の可能性が示されている(二五八頁)。すなわち、これは政治性を取り戻した「アヴァンギャルド」の可能性だろう。

第七章では、戦中・戦後に一貫して植民地主義を批判し続けた思想家、日高六郎 (一九一七―二〇一八年) が論じられている。植民地・青島に生まれた日高は、「マルクスを尊敬する非マルクス主義者」(二七二頁)として、①憲法制定過程で在日朝鮮人・中国人の権利が剥奪されたことを批判し、②『近代文学』同人として「個の自由」を尊重した「社会主義」の可能性を提示した。

以上のように、本書は「正統派マルクス主義」には還元され得ない左翼思想の立場から戦後思想を論じた、稀有なエクリチュール (écriture) となつている。「自由にして平等」の「アソシエーション」を目指す「個人」にとって、サルトルのテクストと同様、本書は「希望」に満ちた羅針盤となることだろう。

■目次

まえがき

序章 自由主義・民主主義・社会主義

- 1 自由主義
 - 2 民主主義
 - 3 民主主義と社会主義
 - 4 社会民主主義の分裂と共産主義の呪縛
 - 5 二一世紀の社会主義
- 第一章 自由主義——民主主義体制の終焉？
- 1 自由主義
 - 2 自由主義と民主主義の歴史的妥協
 - 3 自由主義と資本主義——世界システム論的視点から
 - 4 民主主義への譲歩
 - 5 二〇世紀における自由主義と民主主義の同盟
 - 6 同盟の終焉か、あるいは？
- 第二章 国際冷戦レジームと第三世界
- 第三章 戦後思想の胎動と誕生一九三〇——一九四八
- 1 戦後思想の「兄」たち——「京都学派左派」と文学者たち
 - 2 戦中の戦後思想家たち
 - 3 敗戦・民主化と戦後思想・戦後文学の叢生
 - 4 冷戦の「はじまり」と「戦後」の終わり
- 第四章 敗戦と戦後革命
- 1 戦後民主主義と戦後思想
 - 2 思想家たち
 - 3 初期占領方針——一九四五年九月二六日まで
 - 4 戦後改革Ⅱ戦後革命

- 5 日本社会の状況
- 第五章 日本国憲法の制定と東アジア熱戦
- 1 日本国憲法の制定——革命から改革へ
 - 2 「平和主義」の前提としての米軍沖縄基地
 - 3 教育基本法——「教育の憲法」
 - 4 戦後思想の前景化
 - 5 朝鮮半島の「内戦 civil war」からアジアの「熱戦」へ
- 第六章 越境する世界史家——エリック・ホブズボーム論
- 1 アレクサンドリア、ウィーン、ベルリン
 - 2 グラマー・スクールからキングス・カレッジへ
 - 3 「赤いケンブリッジ」
 - 4 世界戦争
 - 5 冷戦とレッド・パージ
 - 6 フランスへの愛と決別
 - 7 新自由主義グローバリズムに抗して
- 第七章 二〇世紀を生き抜き、思考した東アジアの思想家——日高六郎論
- 1 植民者として
 - 2 憲法第一〇条、「国籍条項」について
 - 3 自由と社会主義
- あとがき